

全日本新体操選手権大会エキシビジョンに出演

三つ子×2組がジュニア最後のステージで 次へのタンブリング!



1_高橋亮斗主将の「ハイ」の声でフロアに向かう選手たち 2_全日本ジュニアではミスがあった「鹿倒立」を見事に成功させる選手たち 3_震災を乗り越え立ち上がる東北の姿を象徴するようなラストポーズに大きな歓声が沸き上がった



佐藤颯人
Hayato Sato

佐藤嘉人
Yoshito Sato

佐藤綾人
Ayato Sato

個人競技は佐藤嘉人くんが5位入賞を果たす!
綾人くんは6位、颯人くんは7位と健闘

団体と個人はまったく別の競技! 選手同士の連携や動きの同一性を重視する団体競技
手具を操ってさまざまな技を繰り出す個人競技 佐藤3兄弟は頂点を目指し全国の強豪に挑んだ!

夢の舞台へ! 全日本選手権のエキシビジョンに出演

11月18日、「第65回全日本新体操選手権大会」が国立代々木競技場第一体育館(東京都)で行われ、熱い戦いが繰り広げられた。この大会は男子新体操の団体・個人の頂点を競う大会。団体は、全日本社会人選手権大会1~2位のチーム、全日本学生選手権大会1~5位のチーム、全国高等学校総合体育大会1~8位のチーム、全日本ジュニア選手権大会1~2位に該当するチームが出場資格を得ることができる。「キューブ新体操教室」の選手たちにとってはまさに夢の舞台。この大会のエキシビジョンに作品の振りが斬新であることや三つ子×2組という珍しいメンバー構成であることが評価され、出演できることになった。東北の復興を応援してくれた全国の人たちに感謝の気持ちや伝えたいという想いが叶った。

高橋3兄弟と佐藤3兄弟が6人そろってジュニアで参加できる最後の大会。6人は夢の舞台で東北の復興を応援してくれた全国の人たちの感謝の気持ち、全日本ジュニアでミスをし「鹿倒立」をはじめ今まで練習してきたすべてを出し切り、

ジュニア最後の大会を締めくくろうと想いをひとつにフロアに立った。

どんなに練習を積んでいても、本番でそれを発揮できないこともある。団体となればなおさらだが、6人は驚異的な同調を見せた。序盤の見せ場の「鹿倒立」を見事に成功。その後も合わせにくい跳躍のタイミングや高さもきれいに揃えた。その演技は、震災を乗り越え立ち上がるうとする東北の姿を象徴しているかのようで、6人の想いが込められた演技に、大きな拍手と歓声が湧き上がった。

6人にとつて忘れられない1日次へのタンブリング!

全日本ジュニアの4位という結果は6人にとつて悔しかったことだろう。納得ができなかったのかもしれない。しかし、そのことが6人を成長させてくれた。うまくいかないことがあったからといって、へこたれる選手たちではなかった。演技を終えた6人の顔は満足感に満ちあふれていた。この経験は必ず6人のこれからにつながっていくはずだ。「次に来る時は、出場資格を勝ち取って来たいです」と話す6人の顔は楽しそうに輝いていた。

個人競技にエントリーしたのは、9つの地区予選を勝ち抜いた42人。個人競技はスティック、リング、ロープ、クラブの4種目が2日間に渡って行われた。

嘉人くんが個人総合で5位入賞種目別ではクラブで2位

嘉人くんのスティックとリングは大きなミスがなく、ともに両種目5位。初日の個人総合は4位となった。2日目のロープは体を大きく使った伸びのある演技をしたが、投げが安定せずキャッチミスをしたり、形がくずれたりするなどのミスがあり11位。クラブは投げをすべてキャッチしたが惜しくも2位。個人総合5位入賞を果たした。

綾人くんが個人総合で6位入賞種目別ではリングで1位

綾人くんのスティックは投げが落下し場外。この種目13位となった。リングはほぼノーミスの演技でこの種目1位。初日の個人総合は7位となった。2日目のロープは大きなミスはなかったが点数が伸びずこの種目は5位となった。クラブは最初の投げを落としたが、それ以外の大きなミスはなく7位。個人総合6位入賞を果たした。

颯人くんが個人総合で7位種目別ではクラブで3位

颯人くんのスティックは手具操作のミスがありこの種目13位となった。リングはほぼノーミスの演技を披露したが動きが小さくこの種目6位。初日の個人総合は11位となった。2日目のロープとクラブはほぼノーミスの演技を披露。ロープが4位、クラブが3位。個人総合7位となった。

来年こそ、表彰台を独占 優勝は三つ子で競い合おう!

柴田監督は、「綾人は3人中で『勝ちたい』という気持ちを強く感じましたが、気持ちが前に行き過ぎていたような気がします。颯人は3人中、一番手具操作がうまく、手具の落下もなかったのですが、身体の使い方が小さかったと思います。嘉人は情緒あふれる強い訴求力を持っていましたが手具の投げが安定していませんでした。これからの課題が見えた実のある大会でした」と振り返った。

「来年は必ず優勝します」と話す3人。互いに競い合いながら、「勝っても負けても恨みっこなし」と次を目指す。